

小宮英美さん
(ジャーナリスト、NHK チーフ・プロデューサー、元解説委員)
の村木厚子さん面会記

2009年7月16日木曜日、南高愛隣会（コロニー雲仙）理事長の田島良昭さんと小宮が、大阪拘置所で村木厚子さんと面会しました。

前日、大阪駅近くのヒルトンホテルに泊まり、事情を知らない誰かに、面会の先を越されてしまうことがないように、朝8時にヒルトンホテルを出ました。面会できるのは1日1組10分だけにかぎられているからです。

大阪拘置所にはタクシーで20分ほどで着きます。正門脇の受付に厚子さんに面会に来たことを告げると、番号札が渡されました。8時半からの面会の、壱番乗りのつもりで来ましたが、8番と9番でした。携帯電話を預けて、荷物の中にカメラなどが無いことを確認してもらい、金属探知機のようなゲートをくぐって待合室に行きました。ここで、住所氏名などの必要事項を用紙に書き込み担当官に渡すと、しばらく待たされます。

ここには差し入れ窓口もあるので、待っているあいだに、書籍などの差し入れの手続きもできます。田島さんは「宮城の乱」という本を差し入れました。面会室で直接渡すことはもちろん出来ませんので。

30分も待った頃に、「8番9番の方12号面会室にどうぞ」と言われ、二人で面会室に入りました。そこは2畳ほどの部屋ですが、10センチ角の鉄の格子で仕切られていて、二人とも椅子に座って、厚子さんを待ちました。しばらくすると、女性の担当官に伴われて厚子さんが入ってきました。水色のTシャツにベージュのズボンといういでたちです。いつもの、あの髪型です。

「村木さ〜ん」と笑いながら立ち上がって、境界越しに両手を挙げると、厚子さんも両手を挙げて笑いながら、ハイタッチみたいな感じで手を合わせながらの再会になりました。触れようと思えば触れられましたので、手に触れればよかったのですが。

田島さんは隣で、半ば言葉を失って立ち尽くしていました。私は田島さんの面会アポに便乗させてもらった立場なので、時間がなくなってしまうのが気になって、「田島さんどうぞ、どうぞ」と言うのに、ほとんど言葉を失っていました。

厚子さんは開口一番、「お忙しいのに遠くまで来てくださって」と、こちらを気遣う言葉をかけてくださいました。「ううん、ううん。お会いできてよかった」とこちらも応えました。この間、女性の担当官は、ずっと厚子さんの隣に座って、会話内容を筆記しています。

とにかく「みんな心配していて、今回の件に怒っていて、みんなが支えているから。支援の会にも次々と応援する声が集まっているから」と、まずは現状報告しました。厚子さんも「大勢

の方から手紙をもらって。中には入省当初の2年間にご一緒ただけという若い元部下の方からの手紙もあって、『村木さんは関係ないって信じています』というような手紙を下さって。とても嬉しかった」と言われました。こちらはとにかく、「みんながついているから大丈夫ですからね。」と繰り返しました。

さらに勇気を持ってもらおうと、小宮が専門誌に書いた原稿「真実はどこに ～郵便割引制度悪用事件～」のゲラを見せて、あと2週間ぐらいで、世の中に出るからと説明しました。村木さんも必死で読んでいました。女性の担当官が身を乗り出して内容を見ていますが、特に咎められるようなことはありませんでした。小さい字で読みにくいので（拡大コピーして行ったのですが、やはり読みにくいですね）、「内容は、村木さんは特別な場所に障害者を困ってお情けでお金を上げるといったような福祉ではなく、障害のある方ができるだけ対等な立場で生きていかれるように心を砕いた方だ。若年認知症の人の支援策として就労支援ができないのか相談したら、ボランティアで夜遅くの勉強会に参加して下さり、モデル事業に繋げて下さったこと、本人は全面否認していて、やはりこの件は客観情勢や動機から見てもおかしいと書いた」と伝えました。厚子さんはハンカチで涙を拭いていました。

続いて田島さんが、先日お会いした方が厚子さんのことをとても心配していたこと、「旧労働省の人はみんな怒っているけれども、旧厚生省の人たちはどうなのか」と聞かれたので、『厚生省サイドの人たちも上から下までみな怒っている』と田島さんが言われたらその方も安心していった」という話を伝えました。何度も頷く厚子さん。

面会より前に郵送で、拘置所宛てに本を4冊ほど差し入れしておりましたので、小宮が「差し入れの本、読みました？ あの『写真集・千年の樹』とか」と尋ねると、「ああ、あの本は気分転換に良いので、よく見えています。大きい樹ってすごいよねえ。」「昨日はナミねえが、クロスワードパズルを持ってきてくれたので、今日はそれを解いていた」とのこと。

田島さんは、厚子さんが拘置所に入ってすぐの頃、東京から美味しいマスカットを買ってきて差し入れしようと思ったのに、「食べ物、差し入れ屋で売っているものしかダメです」と断られたこと、代わりに、そのとき持っていた矯正・更生関係の本を差し入れたことを伝えました。すると厚子さんは、仕事の話でもするかのように、「あの本は勉強になった」と言うのです。つくづく立派な方だと私は思いました。

また、拘置所体験は、究極の入所施設体験だとも。「私はこれまでせいぜい一日くらいしか、入所施設を体験したことがなかったけれども、今回、こういう体験をすることになってとても考えさせられた」とのこと。自ら苦しい体験をしているときでさえ、弱い立場に置かれた人たちのことを思い、いつのまにか仕事にそれを生かすことを考えている厚子さん。早くここから出してあげて、思いっきり仕事をできるようにしてあげたい、と心から思いました。

「局長をしていたときより、こちらのほうがストレスが少ないので、本をたくさん読んでいます」とも。こちらは「これまで働きずくめだったから、特別休暇だと思って、どうかゆっくり

して下さい」と応えるしかありません。でも冷房が無いからとても暑いそうで、それが堪えるとのこと。これから夏が真っ盛りになって酷暑になるのに、本当に気の毒です。

日光の東照宮に行って二人で写った写真を大きく引き伸ばして職場と自宅の目立つところに置いてあり、「毎日厚子さんのことを考えている」と話したら、また涙を拭かれました。こちらは「諦めちゃえばラクになる、なんて考えは絶対に違うからね」と付け加えると、「もちろん大丈夫」と頷いていました。



それから第1回の「支援する会」の作戦会議の写真、大きく引き伸ばして弁護士さんに持って行ってもらったもの、「見ました？」って聞きましたら、「見た見た、超豪華メンバーで、びっくりしちゃった」ですって。「楽しそうな顔して美味しいもの食べててごめんなさい」と謝りました。

最後に厚子さんに「果物何が好き？」とお聞きすると、「ここはナイフを使うような果物は差し入れられないので、ネーブル・オレンジを頂戴しているのだけれども、あれは美味しい」と言っておられました。

この辺りで話が一区切りついたと感じた担当官が、ノートを閉じて片づけを始め、こちらにもそれと分かるように立ち上がり、面会時間は終わりにになりました。「みんなで支えていますからね、大丈夫ですからね、体を壊さないように」と名残を惜しむ私たちに対して、厚子さんも何度も何度も振り返りながら、最後に部屋を出て行くときにも、こちらを振り返りながら、視界から消えていきました。

短い時間でしたけれども、厚子さんと時間を共にすることができました。久しぶりに厚生労働省の廊下でばったり出会ったような感じで、自然にお話したいと思って、夢中で過ぎた10分でした。(実際はもっと長く時間をくれていたと思います。) 皆さんには少しでもリアルに厚子さんの様子を伝え、厚子さんの今を感じて欲しいと思い、長々と書いてしまいました。雑文をお許してください。